

講演録

東日本大震災からの教訓から

皆様こんにちは

ただ今、ご紹介を頂きました、岩手県大船渡市の消防団長の今野と申します。はじめに、昨年の東日本大震災から今日に至るまで、本日ご来場の皆様には様々な形でのご支援、ご尽力頂いております。この場をおかりして、深く御礼申し上げます。

さて、本日はあの大震災で体験した消防団の活動を中心にお話しを申し上げるとともに、皆様方の防災にお役立て頂ければと思いますので最後までよろしくお願いをいたします。

最初に大船渡市は岩手県の太平洋沿岸で一番下が陸前高田市、そのひとつ上が大船渡市という位置関係にあるところです。



岩手県大船渡市消防団
団長 今野武義氏

大船渡市の位置



人口 39,410人
世帯 14,619世帯
面積 323.30km² H24.8月末現在



42名の減員となっています。これは様々な理由がありますが、その理由の大半は仕事先が市内ではなく市外になったという方でした。また、1名だけが、家族から危険なので消防団は辞めてほしいということで辞められた方がいました。

大船渡市消防団は、明治27年に消防組が発足して以来、長い歴史を経て現在に至っています。東日本大震災の被災状況は、当時1,032名の団員のうち、災害活動で3名が犠牲になり、殉職以外の死亡者はありませんでした。被災した屯所は60箇所中22箇所、使用不能になった消防車両は60台中3台でした。皆様もテレビ等で津波の状況を映像でご覧になったと思いますが、私は当日津波が来襲したところを目で見ておりません。数日後、テレビで津波や瓦礫を見たのが初めてでした。その後、津波被災後の状況というのは目の当たりにしたわけですが、映像と何が違うかと言えば、一番は臭いです。映像では、臭いがあ

大船渡市消防団は、1団本部、12分団、51部で、車両は60台であります。このような状況で消防団が運営されております。今現在、消防団員数が1,002名であります、1年前は、1,044名で

りませんけれども、ものすごい異臭でヘドロの臭いが市内全域にありました。また、津波で倒壊した家屋、車両、漂流物がものすごい状態でした。

大船渡市消防団の被災状況

大船渡市消防団 (H23.3.11) 被災状況

団員数 1,032人	殉職団員 3人
屯所等 60箇所	被災した屯所 22箇所
部数 51部	使用不能消防車両 3台
ポンプ車 22台	
積載車 38台	
計 60台	




市内の水門やひ門は消防団管轄が155箇所あり、124箇所がもう使用不能になってしまいましたが、この水門、ひ門155箇所を震災当日全箇所消防団員が閉めました。閉鎖活動をしていた1名がひ門に登り監視をしていて避難が遅れて殉職しました。また、命は助かったのですが、避難している時に津波に襲われ流されたという団員も1名おりました。その団員は、かろうじて流された方向が良くて、流されていた時に、たまたま手に触ったものにつかまったら、目の前に人がいて引き上げられたという状況があったようです。震災当日はこういう状況でした。

沿岸の消防団の被災状況ですが、私達の消防団では、殉職者3名、屯所が22箇所、車両は3台の被害で、現在は新しい車両で活動しております。屯所については、今現在計画を3ヶ年計画で建設

水門・ひ門の被災状況





水門・ひ門155箇所中124箇所(80%)が損傷により使用不能

大船渡市消防職団員家屋等被災状況



家屋被災状況	消防団員	消防職員	自家用車被災状況
全壊	123棟	13棟	101台
半壊	71棟	7棟	
合計	194棟	20棟	

をする予定になっています。

岩手県の消防団員の死者・行方不明者は、119名が亡くなったとありましたが、これには、殉職の以外の人も含まれているかもしれません。我が市は3名でしたけれども、お隣の陸前高田市さんは、50名の団員が亡くなられております。このうち、殉職が30数名と聞いております。これは、人口と浸水範囲と死者行方不明者数というのを見て頂くと、結構差がありますが、これは色々な地形とかが関係すると思いますが、そういうものを別にしても色々な体系というか、良かった、悪かった等別にしても、検証していかなければならない部分がある、この数字の中に含まれているのではないかと感じます。

これは、大きい地震だったので皆様の中にも大きな揺れを体験した方がいると思いますが、この地震によって、建物が倒壊したとかは我が市にはありませんでした。本当に津波さえ来なければ、

大船渡市被害状況



- 死者 340人
- 行方不明 81人
- 建物被害 5,520世帯
 - 全壊 2,787
 - 大規模半壊 428
 - 半壊 717
 - 一部損壊 1,588
- 物的被害 1,077億円 (判明分)

H24年3月31日現在

なんの被害もなく終わったはずです。ものすごく長い強い揺れではありましたが、それでも地震の被害はなかったです。ほとんどの人が尋常な揺れではないと思ったと思います。次に感じたのは津波が絶対来る！と私個人は感じましたけれども、やはり大半の人もそう思ったと思います。しかしながら、あの地震の直後沿岸部にいても、まったく避難しない人がいました。消防団が呼びかけても、避難してくれない人も現実に何名もいました。それまでに、警報、注意報が何回もあり、ここ10年間位結構ありましたが、幸いにも大きな津波がなかったのです。それが当たり前だと思っていた人達もいたのではないかと感じております。ここ数年、宮城県沖地震が高い確率で来ると言われておりましたので、市長も力を入れ消防団の方でも、とにかく警戒はそれなりに行って住民の皆さんに呼びかけてきました。5月に沿岸各地で防災訓練があり、津波避難訓練もします。その時に、いつも避難を呼びかけて、「何名が避難しました」と報告がありますけれども、大船渡市の場合は、とにかく避難をさせろ、避難をしてくださいということで、常に何回も会合があるたびに呼びかけていましたので、避難人員は常にトップでした。一番多くの住民が避難をしてくれました。先ほど言ったとおり被災者の数等を見れば、被災戸数も県内では一番、浸水戸数も多く、比較してみると、普段の避難訓練とかをしっかりとやっておけば、いざという時の生存にかかわってくるのではないかと私なりに感じております。

津波警報が発令されてからのことを市も消防団も色々検証していくうちにわかったことは、防災行政無線は、津波が来るまでは通じておりましたが、津波が来てからは一切機能しなくなりましたが、機能している間に避難を呼びかける防災行政無線が放送されていても、ひとつ問題になったのが住民を含む様々な人の緊迫感がなかったこと。津波が実際に来る状況も市役所から見えませんし、そのなかで放送が行われていたという状況下で、10mの津波が押し寄せているのにもかかわらず、4m位の津波が押し寄せてくる可能性があります。というような放送が出されたことも現実

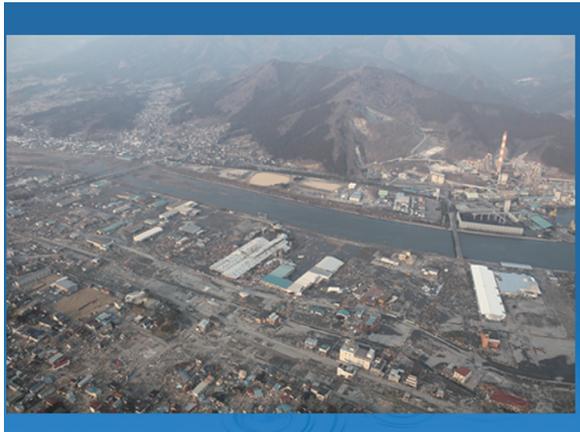
ありました。ですから、そういうことも反省点として、監視を充実させ、もっと的確な情報を一般の人たちに伝える必要があるのではないかと感じました。

市内にある河川の^{サカリガワ}盛川という川ですが、この川をずっと奥まで津波があがりました。小さい川でもそこに津波がどんどん奥まで行くため、沿岸にお住まいの皆様は、是非そのこともご理解していただき、大きな川でなくても川の中心を津波が上って行きますので、そういう点でも気をつけて防災対策にあたって頂ければと思います。

明治から近年の津波の状況ですが、明治、昭和の三陸の大津波というのがあり、明治の大津波の後、吉浜地区という集落がまとまって高台に移転したため、今回の震災には、被害は全然ありませんでした。その後、昭和35年私が小学校4年生の頃チリ地震があり津波がきましたが、今回の津波に比べればまだ被害が少なかったです。だから、今回のような大きな津波なんかは来ないのだろうなどと思っていました。宮城県沖地震が来るって話は聞いていましたので、私の会社では消防団長という立場からも大きな地震がきたら仕事途中でとにかく皆を避難させてくれと日頃から部下達に言ってありました。今回、津波が来た時には私は離れたところに行って会社を不在にしましたが、地震直後様子を見にいった時は、もう皆逃げていなかったので安心して、そのまま消防署に直行しましたが、消防署に到着したその直後に津波が会社のある地域まで来て建物もろとも流されました。ですから、過去の経験も確かに大切なものではありますけれども、それが、全てではなく、常に危険性はあるということです。

沿岸部に膨大な丸太がずっと積み重なってあったのですが、津波の時にこの材木が、ものすごい暴れ方をしました。ここが私の住んでいる場所なのですが、ほかにも材木で川の護岸などがどんどん破壊されました。

支援は、自衛隊、緊急消防援助隊、お隣の住田町消防団等色々ご支援を頂きました。3月11日に真っ暗の中、発電機を使いやっと明るい状態に



なったあたりの、ちょうど午前0時近くに自衛隊から連絡が入りまして、「明日、行きます。明日到着するので、是非消防団と一緒に活動したい」という連絡が消防長に入り、消防長から、消防団に連絡が入り準備を整え、翌日から一緒に活動を開始しました。翌朝、小学校の校庭に、自衛隊、警察、緊急消防援助隊と消防団、それからお隣の住田町消防団とで構成チームを組み最後まで活動をしました。朝、晩には、調整会議を開いて反省、翌日の計画等々をしながら指揮を執りました。搜索活動では最初機械は一切使わないで、人の手により瓦礫をひとつひとつ撤去しながらの搜索活動を行い、それで、発見できず今度は、機械を少しずつ入れて道路の拡張をしながら活動を進めていきました。瓦礫等が大量にあり重機で少しずつどかし搜索活動を進めましたが、かなりの日数がかかりました。

その後、国際救助隊、アメリカ隊2隊200名、オランダ民間ボランティアの方が4人と救助犬が4匹、搜索犬も14匹が入って二日間一斉に搜索

(3)岩手県広域応援協定

・奥州全が町消防本部



(4)消防団

・住田町消防団



(5)警察広域緊急援助隊

・北海道県警、秋田県警、山形県警、
 皇宮警察、警視庁、栃木県警、群馬
 県警、埼玉県警、千葉県警、神奈川
 県警、石川県警、福井県警、京都府
 警、大阪府警、滋賀県警、福岡県警、
 長崎県警



大阪市消防局指揮支援隊

緊急消防援助隊 山形県隊



緊急消防援助隊・自衛隊・消防団・消防署合同搜索

活動を展開しました。消防団と一緒に色々な活動している状況です。運搬とかも行いました。搜索活動中は、釘の踏み抜き等の負傷が多く、とにかくヘドロや泥等の中に入ると安全靴がズルズルになり履けない状態で一回搜索活動に出ただけで履けなくなる状態でした、2回目に履く安全靴がないため釘の踏み抜き等が発生し、負傷した場合は、すぐに病院に行き破傷風の注射を打ってもらうという状況でした。

消防団は色々やることの任務の決まりはあるのですが、この震災の場合は、やれることは何でもやれと命令を出させて頂きました。一番重要だったのは、消防団の無線機です。電気も消えて、携帯も繋がらない、もちろん電話もつながらない中で消防団無線があったので無線で緊急要請をして、救急隊に皆で協力しながら担いで連れて行くとかといった状況でした。住民の皆さんも一生懸命なんとかしようとして協力して一緒にやっている中、悲しいことに震災直後から窃盗団というか、



そういった人たちが入ってきました。11日には大丈夫だったのが12日には物置が開けられていたとか、あるいは被害にあったとかそういったことが耳に入ってきました。夜間にも、各分団から暗い中で懐中電灯を照らして何か探している人がいると報告を受けました。私は団本部で1カ月くらいは寝泊まりしていましたが、最初は消防職団員には食事はなかったのです。当時は米がないとか出さないとかそういうことがあり、苦労して米を買いに行き団員に配ったということもありました。

自衛隊が帰る時の見送りのところです。沿道に団員が並んで挙手の敬礼をして見送りました。自衛隊には本当に感謝しております。

消防団は3月11日から8月31日まで継続して活動を行うなか、次の問題がトイレでした。ほとんどのトイレが使用できなくなり山の方に臨時のトイレを設けましたが大変でした。

冬であれば寒さ対策、夏であれば暑さ対策、電



気がこない状態であれば現代生活は大変です。マンション等に住んでいれば、エレベーターは使えず階段を上り下りしなくてはならないし、都市部になればなるほど大変な状況になるのではないかと考えます。そういった状況下で無線機がかなり有効だということがしみじみわかりました。緊急時の連絡や発災後の電話の通じない時こそ無線機というのは本当に貴重な物で連絡網の中心となって連絡を取り合いました。これが都市部であれば、小さな範囲でそういう物が必要になるのではないかと思います。安全対策や避難誘導、高台の安全な所はどこかということも、今回全く想像を超えるような津波が来たと、どこかで、線を引いてここでやりなさいということが消防団長として、命令しなければならない立場でありますので、やらなければなりません。津波による殉職者がいるなか、どの辺でやるのかということが悩ましいところであります。消防団だけが高い所に逃げて、住民に声が届かないところで逃げろ、逃げろといっても変な話になります。我が消防団では、20分ルールというのを策定しまして、それで活動しています。20分ルールというのは、津波警報が発令されてから20分の間、消防団の活動をして、そのまま安全なところに避難しなさいということで活動しています。消防団が、何をおいても逃げろということの意味するのではなくて、消防団であっても20分程度の活動で避難するのであるから、一般住民の方々は、それ以前に警報が発令されたら、何をおいても避難してくださいという意味です。

団員の命を守るため“20分ルール”

二度と殉職者をださないため、消防団活動の安全管理マニュアルを策定

- ☞地震・津波災害時は、活動時間を20分に設定して、退避を優先する。
- ☞危険を察知したら、20分前でも直ちに退避する。
- ☞勤務地等から屯所に参集する際は、安全が確保されてから駆け付ける。
- ☞退避命令を伝達する手段を、団無線、トランシーバー、拡声器等複数確保する。

妻や息子が流された、自宅を流された団員が、結構多かったけれども、みんな明るい状況というか、後遺症を持つ人はいないと思いましたが、アンケートをとりましたら、悩みを抱えている人50数名が対象になりました。うち相談に来たのは4名しかいないです。まだまだ最近になっても、その当時のことを思い出すという団員もおりますので、まだ心のケアを続けていかなければと思っています。

今回の地震、津波で、すごく感じたのは、消防団長としては、具体的な防災計画があって、その活動の一つひとつ安全に出来るかという見直しは常にしておかないといけないと感じております。今までの活動は、これでいいのかなあと。こういう命令を出して団員を活動させていいのかなあと。今は強く感じております。隣の陸前高田市さんでは、数か所の避難箇所は何百人も避難して来たり、避難誘導してきたわけですが、そのいくつかの避難場所が津波に襲われ、その結果1,700人を超える方が亡くなってしまったという現実がありました。沿岸地域で仕事、または、暮らしている方々は何をおいてもまず逃げることに、すぐに行動を起こすと言うことです。高いところに出て、山の方、どこか高い所はないかと、常にそういうことを頭に入れておいて、家族、あるいは地域のみなさんと、地震や津波災害時には、どうするか話をしておいた方が絶対良いと思います。地震や津波の時、自分はどこにいるかわかりません。前もってそうやっていかないと自分の命すら守れな

消防団員に対する「心のケア」について

- 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター(神奈川県横須賀市) 副院長 松下幸生医師の協力で実施
- 全団員にアンケートを実施し、個別に封書にて送付(平成23年9月 683通回収(65.4%))
- 松下医師がアンケートを分析し、個別面談を実施
- →平成24年2月17日 4名

くなると感じました。皆様の地域には、今回のような災害が絶対に起きないように心から願っておりますが、どうか、皆様消防団を担当なさっている方々と伺っておりますが、地域を含めて、町、色んな方々と色々相談をしながら、意識をもってやっていただきたいと思うのと、遠慮しないでドンドン安全対策をまとめていって頂ければと思います。

私たち大船渡市の消防団員は法被を着て消防団活動をしています、これを着て活動していると消防団員であることが一目で住民にわかり住民が安心して火災現場や災害時などに消防団員に助けを求めたり、相談して来たり声をかけてきます。だから地域のためにある消防団としてのシンボルマークとして法被を着て活動をしています。

最後になりましたが、本当にもう私たちのようなことにはならないように願ひまして、つたない講演ではありましたがこれで終了とさせていただきます。本当にありがとうございました。

